村上元三

ある侍の生涯

ある侍の生涯

村上元三

毎日新聞社

ある侍の生涯

定価一三〇〇円

一九八八年九月五日 第一刷
一九八八年一一月三〇日 第二刷

著者 村上元三

編集人 沢畠毅

発行人 川合多喜夫

発行所 毎日新聞社
東京都千代田区一ツ橋／大阪市北区堂島／北九州市小倉北区紺屋町／名古屋市中村区名駅

印刷 中央精版
製本 大口製本

検印省略

Printed in Japan

ISBN4-620-10370-5

ある侍の生涯・目次

町方同心の家　7
出勤第一日　19
お吉という娘　32
火事場改役　46
七夕の日　59
身売り証文　73
シーボルト事件　87
寒い風　100
初手柄　113
鼠小僧の噂　127
噂の男　141
木やり唄　155

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大坂への旅 169
京見物 182
淀川三十石船 196
大坂米騒動 210
新町の廓 222
窮民組 235
大塩挙兵 248
上申文 261
鍛屋の一味 274
天保の改革 287
蝮の眼 300
五月晴れ 314

装幀　佐多芳郎

ある侍の生涯

町方同心の家

一

小西小十郎は、子供のころから、父の役目の町奉行所同心という役をつぎたい、と思っていたわけではなかった。

江戸南北両町奉行所づきの与力はそれぞれ二十五騎、同心は百二十人ずつ、と決められている。与力の身分は旗本なので馬に乗る資格があり、それで何騎と数えるが、同心は旗本以下の家人で、一代勤めと決められ、世襲ではない。

だから小十郎は、父のあとをついで同心になることは出来ないし、元服をする前から他家へ養子に行くか、町人になって算盤をはじく生活に入るか、どちらでもいいと思っていた。それが偶然なことから、見習同心になり、南町奉行所に出勤する破目になったのであった。

この文政八年（一八二五年）で、小十郎は十八歳になる。

父の東介は四十二歳、母のおきぬは三十八歳、八丁堀の役宅には、ほかに中間の和助、女中のおいちの五人暮らしで、三十俵二人扶持の定廻り同心にふさわしい生活であった。

一口に八丁堀といわれるが、北は南茅場町、南は八丁堀代地、東は亀島町、西は北島町から岡島町へかけての名称で、ここの中に南北両町奉行所の与力の組屋敷と同心の組長屋が固まっている。

いわゆる官舎なので、家賃はいらない。与力の屋敷はめいめい冠木門、玄関を構え、あるじは旗本

なので殿様と呼ばれるのが当然だが、八丁堀の与力にかぎって旦那という。ただし、妻は奥様と呼ばれる。同心のほうは、旦那にご新造であった。同心の組長屋は、一組ずつに門があり、その中に組長屋が軒をならべている。

父の小西東介は、毎朝、歩いて数寄屋橋門うちの南町奉行所へ、中間の和助を従えて出勤する。いろいろな役目に分かれている同心の中でも、東介は定廻りなので、毎日、定められた区域を歩いて見廻りをする。

各町内に一つずつある自身番に立ち寄って、交代で詰めている町名主・家主などへ声をかける。

「番人、何事もないか」

「へい、おかげを持ちまして、何事もございません」

町内役人たちが答えればいいが、ゆうべ喧嘩があって怪我人が出た、泥棒が入った、などということになると、すぐ定廻り同心は取調べをはじめる。

御朱引内といわれる江戸市中を巡回して歩くので、定廻り同心は服装についてはうるさい。いつも着流しに羽織で、腰にさした大小が刃引きなのは、犯人を殺すのが目的ではないからであった。脇差とならべて、帯に朱房のついた十手をさしている。剣道の中に十手術があり、ことに定廻り同心は十手術を鍛練し、対手が得物を持って立ち向かってきたときは、それを叩き落し、抵抗力を失わせる。

定廻り同心には、俗に岡っ引と呼ばれる奉行所の小者が従っているので、「縄を打て」と言いつけると、岡っ引が縄をかける。定廻り同心が、自分で縄を打つことはない。

町内の自身番に、盗人が捕えられて、柱の鐶に縛りつけられているときは、定廻り同心が盗人を受けとり、茅場町三丁目と四丁目のあいだにある三四の番所というところへ引き立てて、下調べをす

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

る。それからあとの取調べは、町奉行所の吟味与力の担当であった。
市中見廻りのとき、夏は菅笠をかぶってもいいのだが、それでは小銀杏という八丁堀同心独特の結い方をした髪が乱れる。だから炎天下でも、笠なしで市中を歩いた。
風采についても、八丁堀同心はおしゃれなので、毎朝、廻り髪結が道具箱をさげ、役宅へ来て髪を結い、顔を剃る。
小西小十郎は、子供のころから、父親のそういう日常は見慣れていた。
近くの神保小路の寺小屋では、いつも小十郎は習字の筋がいい、と賞められた。十歳になったころ、もう四書五経を暗記していた上、算盤も上達していた。
「この子は、商人になったほうがよろしかったのやも知れませぬ」
ときどき母のおきぬが言ったのは、ひとり息子の将来に望みを托していたのか、それとも嘆いたのか、小十郎自身にはわからない。母は、同じ八丁堀神保小路の医者、野村仙庵のところから嫁いできたので、小十郎が望むのなら、医者のところへ修業にやってもいい、とも考えていたようであった。
しかし、父の小西東介は、そうではない。
幼ないころの小十郎を膝に乗せ、毎晩おきまりの晩酌一本でいい心持ちになると、息子へ言って聞かせた。
「よいか、父のようなお役目を、世の中には不浄役人と呼んで、ばかにする者がいる。ことに、お大名の禄を食む勤番侍たちだ。そういう連中こそ、どうだというのだ。父からゆずられた知行をそのまま、有難く頂戴して、無事に暮らしていりゃあ、世の中をおだやかに渡れる。だが万一、殿様がしくじりでも起こせば、主家は断絶か、よくてお国替えだ。そこへ行くと、おれたちの役目は、江戸の悪

党たちを片づけるという、世の中の役に立つ仕事だ。ときには、いのち賭けで悪党を捕えに出かける。一年に、わずか三十俵二人扶持という安い知行で、欲得ずくを考えれば、算盤に合う仕事じゃあねえ」

一本の銚子で、父の東介はいい機嫌になるが、小十郎は、そういうときの父親が好きであった。

たしかに、家の生活はらくではないし、母のおきぬが、ときどき質屋へ行ったり、同じ神保小路の実家へ金の無心に出かけるのは、小十郎にもわかっていた。

十五歳になったとき、父の組頭、五番組与力の尾崎久兵衛が烏帽子親になって、元服の式をあげてくれた。

そして、十八歳のいま、小十郎は松屋町の一刀流の武田弥助道場で切紙の腕前になっているが、それを自慢にすることもないし、これまで喧嘩をしたおぼえもない。

その小十郎が腹を立てたのは、よくよくのことであった。

二

父の東介よりも、小十郎は母のおきぬに似たのであろう。元服をしたころから、八丁堀界隈の若い娘たちに騒がれるようになった。

南茅場町の山王権現の縁日のときなど、小十郎が着流しに脇差一本の姿で歩いていると、近所の娘たちが足をとめ、小十郎のほうを眺めながら、ひそひそ話をしている。

小十郎は気にもしないが、供をしている中間の和助は、役宅へ戻ってから、そっとおきぬに言うよ

うになった。
「ご新造様、そろそろ若旦那のお嫁さんをご心配なすったほうがよろしゅうございます」
和助は、浅草馬道の口入屋の世話で奉公にきた男で、三十を越している。これまで旗本屋敷を三軒ほど歩いた渡り中間といわれる手合いで、奉公先によっては毛嫌いをするところも多い。
一定の奉公口を持たず、次から次へ奉公口を変える傭人は、長続きがしないものだが、その和助も、ここのあるじの小西東介にはよく仕えている。これで十年、旗本に比べれば身分の低い同心の小西の家におちついて、陰日向なく奉公をしていた。
融通が利かない、と八丁堀同心のあいだで定評のある小西東介が気に入ったようだし、妻のおきぬが奉公人の使いかたが上手なせいもあるからだろう。
「小十郎には、まだお嫁の話など早すぎますよ。そんな心配など、おやめ」
おきぬは笑ったが、なおのこと和助はまじめな顔つきになった。
「武田先生の道場で、若旦那のことをどう噂をしているか、ご存知でございますか。小西の堅物、と評判でございますよ。道場のご門弟仲間には、もう吉原通いをなさるかたもおいでですから」
「小十郎は旦那様に似て、きっと女嫌いになるよ」
そう言ったおきぬは、細面で色が白く、ほっそりした身体つきで、小十郎はその母親に似ている。
父の東介は、がっしりと肩が張って、眼鼻立ちは尋常だが、美男というには遠い。
「でも、道場には小十郎と同じような年配の若い人が多いのだから、朱にまじわれば赤くなるのたとえもあるね」
少し心配になってきたおきぬは、その日の夕方、奉行所から帰ってきた夫の東介を待って相談をし

た。
「気になるのか、小十郎のことが」
東介は、心配をする様子もない。
「少しぐらい女に騒がれたからとて、心配はいらねえ。それよりも、小十郎のこれからを案じてやらなくてはならねえ」
町方同心は一代限りの奉公、と決まっているが、小十郎が元服をしたあと、養子にほしい、という話が八丁堀役人の数家から持ちこまれた。
しかし、ひとり息子のことだし、東介もおきぬも、養子にやる気はない。できれば八丁堀役人の家から、しかるべき娘を小十郎の嫁に、と考えている、こういう貧乏同心の家に来てくれる娘があるかどうか、東介夫婦にも今のところ当てはない。
「それよりも、差し迫って金の算段をしなくてはならぬ」
と東介は、溜息をついた。
「例の金の期限が、今月の末だ」
「今月とおっしゃっても、もう四月の半ばでございますから」
と、おきぬは、夫の前に両手を仕えた。
「姉夫婦のために、申訳ございませぬ」
「いや、お前の姉夫婦を責めても仕方がねえ。あのときは、お前の姉も返せるという当てがあったのだろうから」
「お金を借りた対手が、悪うございました」

「おれも、顔を知っている奴だからな、二か月や三か月、返済の期限をのばしてくれるだろう、とたかをくくっていたおれも悪い。向うが、この件を明るみへ出せば、おれも無事では済まねえ」
「でも、お役向きへ訴え出るようなことは、ございますまい」
「それが、蔵宿師というのは、いざとなると手に負えなくなる。おれたち小役人は、蔵前の札差には、例外なく借金をしている。蔵宿師が、おれたちをつぶそうと思ったら、造作のねえことさ」
旗本でも三千石以下の知行取りは、浅草御米蔵の前にならべた札差商人から、蔵米のかわりに金を受け取る。
小西東介のような定廻り同心は、一年に幕府から受けとる米は三十俵、それに二人扶持というのが加わる。一人扶持とは、ひとり毎日三合ずつの玄米を支給されることで、二人扶持では六合になる。
しかし、三十俵二人扶持では、家族三人のほか、奉公人二人に一年五両ずつの給金を払うと、ぎりぎりの生活であった。
南北両町奉行所に付属する同心二百四十人のほとんどは、来年あるいは数年先の知行米まで抵当にして、蔵前の札差から金を借りている。
札差が金を貸さなくなると、そのあいだを周旋するのが蔵宿師という存在であった。蔵前に店を持っているのではなく、金に困った旗本や御家人にかわって、札差から金を引き出してやり、かわりに高い利子をとる一種の金融ブローカーのことを言う。
小西東介が、その蔵宿師のひとり、銀兵衛という男から五十両もの大金を借りたのは、おきぬの姉夫婦に泣きつかれたからで、店の借金を肩がわりしてやる、という東介の親切ごころから出たのであった。

おきぬの姉は、両国広小路で小料理屋をやっているが、その亭主が頼母子講の金を使い込んだからで、おきぬも実家へ無心に行くわけにも行かず、夫の東介に相談をした。

東介も、蔵前の札差から金を借りているし、いまのところ、それを払う目当てもない。だから顔見知りの蔵宿師、銀兵衛に話をしてみると、一も二もなく、五十両の金を用立ててくれた。

おきぬの姉も、一年ほどで返せる見込みはあったのだが、それも外れてしまい、銀兵衛に借りた金は利息が十両にもなった。

そして、今月の末に期限が来る。

「父上のところへ参って、拝借をします」

そう言ったおきぬへ、東介は首を振った。

「なにかというと、お前の実家へ泣きついて行くのだ。こんどだけは、おれに任せておけ。銀兵衛も、まさか金の代りに首をよこせ、とは言うめえ」

「ことしの四月は、目に青葉、山ほととぎす初鰹、どころではございませんね。申訳ございません」

両手を仕えたおきぬへ、東介は笑顔を見せた。

「お前の姉夫婦も、実家の敷居が高かろう。困ったときは相身互いだ」

三

その月の三十日、小十郎は道場の帰り、友達のところへ寄って、陽の暮れるころ、神保小路の家へ帰ってきた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com